第１回「パイレーツ・モダニティ――海賊，奴隷，資本主義」

はじめに

西　成彦

○**西**　私はこの間，言文研では「環カリブ地域における言語横断的な文化／文学研究」，略して「環カリブ文化研究会」を中心に研究活動を進めてきましたが，そういう文脈の中で，「パイレーツ・オブ・ザ・カリビアン」じゃありませんけれど，「海賊」というテーマに一度はチャレンジしてみたいということがあり，そこで，今回は小笠原博毅さんをお招きすることにいたしました。

今回の連続講座は，趣旨文にもありますように，国民国家の排他性と暴力性が牙をむく現代という，そういう問題設定からでき上がっています。

まず，第一次世界大戦，第二次世界大戦を終えた後，ハンナ・アーレントは，まさに国民国家というものが，難民，あるいはDP（ディスプレイスト・パーソン），あるいは無国籍者なるものを生み出していってしまうというその皮肉について語りました。ジョルジョ・アガンベンあたりが「難民」を手がかりにして「市民権」なるものの自明性を問い返そうとするのも，ある意味ではアーレントの「人権」論の延長です。

また，10年ぐらい前はシティズン（citizen）に対してデニズン（denizen）という言葉を対置する空気がありました。最近は，あまり耳にはしなくなってきているのですが，「国民国家」を前提としがちな「市民権」から落ちこぼれる存在をどう名指せばよいのか。そういう問いに答えるべく，「都市」cityの民ではなく，「巣窟」denの民ということで「デニズン」が「シチズン」に対置されたのです。

そうこうするなかで，近代初期をふり返りながら，「海賊」そして「奴隷」といったスティグマ化された存在のなかにこそ，歴史の「主体」が宿っていたのかもしれないという発想の展開が動きとして出てきたのが，21世紀に入ったころでした。

海賊というものは，いわゆるグローバル化が進む市場経済が世界を覆い尽くしていき，同時に国民国家がそれぞれ分断しながら国益を守っていくといこうとするとき，その利害を調整する国際社会によって忌避される存在だと，まずはそんなふうに言うことができます。

また，奴隷なるものは，近代あるいは民主主義，あるいは人権の名において，もはや不可視化された身分の名称です。つまり奴隷身分に誰も身を置いてはならないと，置かせてはならないと，そういうふうに負のスティグマを与えられてきたわけです。

しかし，今日はまさにその海賊と奴隷とを歴史の表舞台に呼び戻そうと考えています。

しかも，その２つの概念を考えるときに，カリブ海地域が特権的な場所になっているというのが，ある意味で，おもしろいわけです。私たちが「環カリブ文化研究会」を進めるにあたっては，そこがまず旧奴隷制の社会であったということが認識の基本でしたし，また今日の文化や文学を研究するに当たっては，このカリブ海地域の島々がさまざまな言語によって分断され

てしまっている，スペイン語，フランス語，英語，あるいはオランダ語，パピアメント語というふうな，そういうふうな言語によって分断されていて，なかなか横でつながることができず，かつてはヨーロッパの宗主国とつながり，今日は北米の前庭と化しているという，こうした現状を前提にしなければなりません。

ここは，発想を切り替えて，カリブ海は欧米列強の周縁なのではなくて，むしろ欧米を欧米たらしめたのがカリブではないか。じつは，このような思考に先鞭をつけたのが，エリック・ウィリアムズというトリニダード出身で，後に首相にもなる歴史家でした。そして，それを受ける形で「世界システム論」を唱えたのがウォーラーステインだったわけです。

また，そういうのと並行して，皆さんもよくご存じと思いますが，『ブラック・アトランティック』を書いたポール・ギルロイがあらわれ，その後，マーカス・レディカーのような奴隷船研究者，あるいは奴隷の反乱の研究者が登場するようになって，そういうときに，いつでもカリブ海の歴史が呼び覚まされる。

そういうところから，今日のパネルを思いつきました。となると，まさに「パイレーツ・モダニティ」概念の紹介者の一人である小笠原さんをお招きするしかないだろう，ということで，この企画となりました。

なお，コメンテーターとしては，ラテンアメリカ文学でとりわけキューバの文学を研究されている東京外国語大学の久野量一さんと，本学のアメリカ史の米山裕先生にコメンテーターを務めていただきます。

それでは，小笠原先生，どうぞよろしくお願いいたします。